

ARCADIA

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS





NHK大河ドラマ特別展

どうする家康

湯谷 翔悟

会期 令和5年7月1日(土)～8月20日(土)

展覧会で実物を展示する意味とは。

もはや擦り切れるほど議論されてきた命題であるが、こと本展览展示品と大河ドラマとの関わりを踏まえて考えてみたい。

いかに万全の体制を整えようとも、いかに丁寧に扱おうとも、資料を展示する限り微細な劣化は避けられない。それでも展示するからには、それだけの意義と意味を示さないといけない、と思う。一方で、時に実物を見なくても、図録やデジタル公開されている高精細画像を見れば充分という声も聞く。

しかし本展はそれに当てはまらないと自信を持って言える。名だたる名刀は言うまでもないし（これはもはや文化として定着した刀剣人気を思えば、本当に言うまでもない）、等身大の家康像（知恩院）や織田信長像（総見院）は、実物を見てその大きさを感じてこそ意味がある。

対して名古屋市中区初公開という今川義元像（長福寺、画像1）は、その小ぶりさにこそ意義がある。

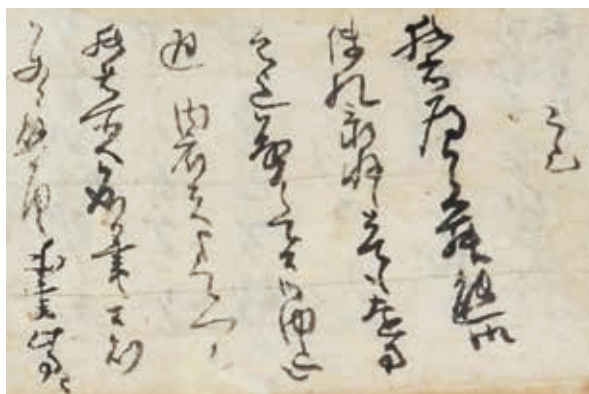


画像1 今川義元坐像（長福寺）

この像は江戸時代の正徳四年（一七一四）に、江原村（現西尾市）の渡辺氏が寄進したものである。渡辺氏の先祖は、桶狭間に従軍したと伝わる。無念の死を遂げた義元の弔いが、一五〇年以上経つてなお、在地で続いていたことを示している。俯きがちに造られており、見上げて拝むことを企図した尊像であることがわかる。像の大小ではなく、義元の像を祀り礼拝するその思いこそが重要であることを伝えてくれる。江戸時代の人々の義元への尊崇の念を、この義元像と目を合わせ、拝んでみて感じてほしい。

実物を見る重要性は、古文書に関しても同様である。ぜひとも実物を見てもらいたいのは、黒田長政自筆書状（吉川史料館、画像2）である。西軍の吉川広家に対し、家康に反旗を翻したことは不問にし、家康との仲介を行うことを約束している。吉川広家と家康の不戦の密約に繋がっていく書状であり、絶対に見つかってはならない内容で

あった。そのために、ある細工がなされた。図録の写真ではわかりづらいが、この書状は横に四つに切られている。曰く、関ヶ原で無事に送り届けるために細く切り笠の紐に捲り込んでいたとのことである。この逸話は少なくとも一八世紀初めには伝わっていたようで、信用して良いであろう。



画像2 重要文化財 黒田長政自筆書状（部分）

得てして古文書は、「読めないから…」と敬遠されがちである。しかしこの書状は内容に加えて切られていることに「情報」がある。この書状を届ける役を命じられた者の気持ちを想像してほしい。不戦の密約の交渉が記された内容。これが敵の目に触れたら自分の命はおろか、戦局すら危うくしかねない。誰が送り届けたかは不明であるが、この書状が吉川家に伝来したということ、無事大役が果たされたということである。名の伝わらな

い「誰か」は、「天下分け目」を見事に成し遂げたといえよう。

また、不戦を決めた毛利家の地位を保証することを誓約した井伊直政・本多忠勝の血判起請文（毛利博物館）は、二人が捺した血が遺っている（表紙画像）。起請文は約束を違わぬことを神仏に誓うもので、約束を破れば、罰文という後半部分に名が記された神仏の罰をうけるというもので、特に重要な誓約に用いられる。その中で血判が捺されるものは多くなく、ここで交わされた誓約が、極めて重要だったことがうかがえる。

と、小難しいことを考えずとも、やはり血の痕というの怖いというか、少し心をざわつかせる。加えて、私はこの古文書を初めて生で見たととき、「あ、本多忠勝って本当にいたんだ」と感じた。忠勝のことは知っている。同時代史料に即して見直そうともしている。肖像画も見たことがある、なんなら彼の甲冑に触れている。しかしあまりに超人的なエピソードに彩られた彼のことを、どうやら無意識的に遠い存在に感じていたようである。研究対象、というのに近いかもしれない。しかしこの血痕を見て、彼が確かに生きていたということを実感させてくれた。これは活字では絶対にわからない、写真でも弱い、実物こそが持つ力であろう。

こうした力は、厳選に厳選を重ねた本展の全ての出品資料が持っている。それが伝わらなかつたとしたら、展示の仕方か解説の書き方、構成の立て方：要は展示担当の問題である。加えて、大河ドラマとタイアップした本展は、ドラマや出演者を通して興味をもっていた方も多い。そうした方のように展示品の魅力を伝えるかは、本展の構想段階から意識してきたことで、それは

図録のレイアウトや、キャッチコピーなどで形にした。

しかし、先行して開催された三井記念美術館の展示の感想をSNSで見ると、より良い形があったと思う。SNSでは「金陀美具足のホンモノだ！」というようなコメントがとても多かった。要はドラマという基盤があり、それとリンクすることが展示資料に興味をもっていたか、一番の近道ということであろう。

そうした視点で見えていくと、また違った視点からの紹介もできる（できた）資料がいくつかあった。例えば榊原康政の甲冑を、本展では二つ展示する。重要文化財の《黒糸威二枚胴具足》（東京国立博物館、画像3）と、新潟県指定文化財《茶糸素懸威黒塗桶側五枚胴具足》（榊神社・旧高田藩和親会管理、画像4）である。この文章を書いている六月時点では、ドラマ中ではいずれの甲冑も着用していない。しかし三方ヶ原の戦い前の甲冑をよく見ると、東博甲冑の兜の前立である三鉞剣と、榊神社甲冑の兜にある鉢巻のモチーフをうまく融合し

た甲冑に仕立てていた。

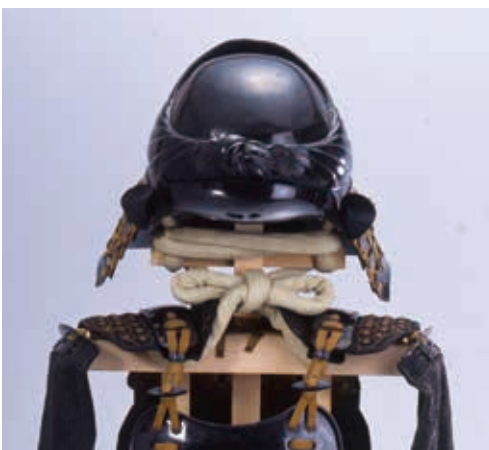
今回の大河ドラマを観ていると、最新の研究や不確定な事象を、作中に落とし込むのがとても上手いなと感じることが多い。それを解説やコラム等で紹介すれば、小手先の親しみやすさより、ずっと開けた門戸になったろうと思う。ドラマという歴史への共通認識を活用すれば、実物の魅力や価値をより鮮明に伝えることができたであろう。それが本展で表現できているかと言われると、率直に言ってもやや心許ない。

もっとも言い訳がましい弁明をすると、図録入校は昨年末、つまり大河ドラマ放映開始前にはほぼ終わっているというスケジュールになっっている。そこから構成を変えようというのはなかなか難しい。ドラマと展覧会が必ずしもリンクできていないのは、そうした実情によるものである。

ただし、展覧会はこれから始まるころである。情報発信や展示説明会など、工夫する余地はまだまだある。実物を見ないと伝わらない力を伝える手伝いを、最後まで務めたい。



画像3 重要文化財 黒糸威二枚胴具足（部分、東京国立博物館）
出典：ColBase(<https://colbase.nich.go.jp/>)



画像4 新潟県指定文化財 茶糸素懸威黒塗桶側五枚胴具足（部分、榊神社、旧高田藩和親会管理）

シュルレアリスムの声

—La Voix du surréalistes

vol. 1

田中 裕紀乃

サイクロニック・ランドスケープ

3

クルト・セリグマンは、一九四〇—四四年の間、「サイクロニック・ランドスケープ」と称するシリーズを制作している。これは彼自身が命名したもので、日本語に訳すと「旋回する風景」であろうか。これらは、割れたガラスを紙やキャンパスの上に投影し、そこに投影された形を写しとることで制作された。

「サイクロニック・ランドスケープ」における「サイクロニック」は自然災害の「サイクロン」由来している。それは本シリーズに繰り返し登場する「サイクロンのような」形状から見ても明らかであろう。

美術用語における「ランドスケープ」とはただ自然を模倣するだけでなく、制作者の内面のメタファーでもあると言える。つまり、「ランドスケープ」とは単に風景を描写しているのではなく、人の心理状態を映し出す鏡として機能しているのである。「サイクロニック・ランドスケープ」は、シュルレアリスムの手法である「オートマティスム（自動筆記）」（割れたガラスの使用）とロベルト・マツタが提唱した「心理学的形態」を融合したものである。それは、「ネオ・コンクレティスム」という彼独自の概念を念頭に置いてのことである。セリグマンは、自身の芸術を抽象化とシュルレアリスムを組み合わせた新しいスタイルになると定め、それを「ネオ・コンクレティスム」と称した。セリグマンの「サイクロニック・ランドスケープ」の手法は、シュルレアリスムにおける「デカルコマニー」「フュマージュ」などに匹敵するような独

創的な手法であると言えるだろう。

さて、当館はこの「サイクロニック・ランドスケープ」シリーズの作品である《メモノンと蝶》一九四二年を所蔵している。メモノンとは、ギリシャ神話の英雄の名である。オウイデイウスの『変身物語』によると、メモノンはトロイ戦争でトロイ側の援軍として参加し、多くの手柄を立てたが、アンチロコスという青年を打ち取るとその親友のアキレウスによって打ち取られてしまう。そしてメモノンを火葬した炎は高く燃え上がって崩れ落ち、その灰から鳥が生まれると「メモノンの鳥」と呼ばれるようになるのである。

本作では、幻想的な風景の中に、「サイクロン」のような形態と、「蛹」を模した岩のような造形がみえる。そして宙を舞う擬人化した生き物が前景に三体、そして画面右の上空に多数見受けられる。「サイクロン」や「岩」、そして「蛹」は薄い布のようなものに巻かれているようにも見える。「蛹」はやがて羽化して蝶になるのだろうか。上空に見える生き物は、メモノンの灰から生まれた鳥を示唆しているのかもしれない。

本作は、「サイクロニック・ランドスケープ」の中に擬人化した生き物が描かれているユニークな作品である。セリグマンは、本シリーズに取り掛かる以前に、擬人化のアプローチをよく行っていたが、同シリーズの中に描くことはほとんどなかった。《メモノンと蝶》は、作品全体との関連において、「サイクロニック・ランドスケープ」の概念と、擬人化のアプローチを結合した作品であると言え

る。本作では、想像上の風景でありながら、現実の自然現象（サイクロン、蛹）が共存している。これらの奇妙な両義性が、本作に魅力を与えているのである。

※本作は今冬「レアリスムの視線」展に出品予定です。是非会場でご覧下さい。



クルト・セリグマン《メモノンと蝶》1942年
油彩・キャンバス 122.0 × 150.0cm

作家紹介

クルト・セリグマン（一九〇〇—一九六二）。スイス系アメリカ人。シュルレアリスム、学者。スイス・バーゼルで生まれ、パリ、NYで活躍する。中世の紋章学的モチーフやネイティブアメリカンのトーテム信仰、オカルトなどユニークな主題に関心を持ち、芸術活動を行った。



江戸時代の

事件簿

山下 葵

CASE 1



これは、江戸時代に本当に起こった事件の話である。事件といっても国を揺るがすような大事件ではない。後世、学校の教科書に載ることもないだろう。私たちと同じように、普通に暮らす人々が関わった犯罪である。

どんな罪を、どのように裁いたのか。今回より、不定期の連載ではあるが、当時の「事件簿」を紐解いていきたい。

ちのという少女の話

この事件が起こったのは熊本藩。現在の熊本県である。熊本藩は第六代藩主細川重賢のもと、宝暦の改革という藩政改革が行なわれ、その政策の一環として「刑法草案」という藩法を編纂している。これは、熊本藩内で適用される刑法である。

熊本藩の法制史料は、多数現存している。次に示すのは『例』¹という判例集に収められている天明八（一七八八）年の判例である。

物もらひ伊右衛門娘

ちの

天明八年十二月

右者、^①同類申合於所々、致盜候付、^②贓数
を以七十答二可被仰付哉之処、^③十二才二相
成候付、^④贓 刑可被仰付等候得共、^⑤物も
らひ之事二付、御刑法場叱、

これは「ちの」という名前の十二歳の少女が起

こした窃盗事件である。ちのは「物もらひ」の伊右衛門という人物の娘である。ちのは、仲間たちと申し合わせて、複数の場所で盗みを行った（傍線部①）。その「贓数」すなわち盗んだ金額に基づいて、「七十答」の刑を科されるはずであった（傍線部②）。刑法草案では、窃盗は盗んだ金額により段階的に刑罰を規定している。この史料では「七十答」に相当すると記されており、これを刑法草案の規定と参照すると、十五貫文以上二十一貫文以下の盗みをしたということになる²。

しかしながら、ちのは十二歳であり、年齢を考慮すると贖刑（罰金刑）に処されるはずであるところでは述べられている（傍線部③）。刑法草案では年少者に対して、刑罰適用上の特別措置が設けられていた。それは「老人幼少之者犯事」条であり、次のような一文がある³。

一七十歳以上十五歳以下之者、徒刑以下を犯候ハ、贖を以宥之、死刑を犯候ハ、當罪を以論、

つまり、七十歳以上の老人と十五歳以下の年少者が、「徒刑以下」すなわち徒刑や管刑を科されるような罪を犯した場合は、贖刑（罰金刑）に変換するという規定である。この規定に拠れば、ちの

も相当の罰金を納めるはずであった。

だが、彼女が「物もらひ」の身分であることを考慮して「御刑法場叱」となった。「物もらひ」（物貰い）とは乞食のことであり、貧困の身分であった。乞食であるちのや、その親である伊右衛門には、罰金の支払い能力がない。そのため、今回は個別の事情を考慮して「御刑法場」に呼び出して「叱」（口頭での嚴重注意）をすることで決着した。

以上のちのの判例から、基本的には遵守すべき法である刑法草案に依拠しながら量刑しつつも、最終的には個別の事情に鑑みて、刑罰を臨機応変に運用している様子がうかがえる。

「叱」は、刑法草案のなかでは具体的な規定がなされていない刑罰である。逆にいえば、絶対的な守るべき法である刑法草案に規定されていない「叱」は、ある程度の柔軟性をもって適用することのできる刑罰であったといえよう。

基本的には法に則りながら、現実的に執行可能な刑罰で、なおかつ犯罪者を懲戒することのできる刑罰の落としどころを模索していたのである。

さて、ちのであるが、その後どうなったのであるか。次の事件簿をめぐってみよう。

〈続〉

¹ 永青文庫蔵（熊本大学付属図書館寄託）

「自寛政三（二七九）年至文化七（二八〇）年例（表紙欠損部にエンピツ書）」

（目録番号 十三十一・九二）

² 小林宏・高塩博編『熊本藩法制史料集』

（創文社、一九九六年）三七四～三七五頁。宝暦十一年施行の刑法草案「窃盗」に拠る。

³ 小林宏・高塩博編『熊本藩法制史料集』前掲書、三六〇～三六一頁。

徴兵検査 戦争の記憶を伝えること

5

伊藤 久美子

今回の原稿テーマを考えている最中に、G7広島サミット（主要7カ国首脳会議）が開幕した。核軍縮の進展を願う被爆地広島に参加国の首脳たちが参集し、被爆の記憶を継承する平和記念資料館を初めて訪問したニュースをメディアが大きく報道している。広島に原爆が投下されたのは昭和二〇年（一九四五）八月六日、三日後の九日に長崎にも原爆が投下され、八月十五日日本は終戦となった。昭和という時代、終戦を迎えるまで日本は長い間戦争の時代だった。昭和一六年一月八日ハワイ真珠湾攻撃によって始まった太平洋戦争（大東亜戦争）だけでなく、昭和の幕開けと同時に昭和二年山東出兵、十五年戦争の発端となる六年満州事変、日中戦争（支那事変）全面化へとエスカレートする一二年盧溝橋事件というように、日本は絶えず戦争の足音とともにあり、大勢の人が徴兵され戦地に送り込まれた。

国民の兵役義務を定めた徴兵令は明治六年（一八七三）に制定され、国民皆兵制度の下、満一七歳から四〇歳までの男子には兵役が義務化されていた。一七歳というのは志願できる年齢で、二〇歳になった年（前年一月一日から当年一月三〇日まで）に満二〇歳に達する者に徴兵検査を受けさせ、大量の兵士を強制的に徴集できる制度だった。



岡崎市公会堂での徴兵検査の様子 昭和18年頃
市役所からは記録係として戸籍係が担当した。

常備兵役・後備兵役・補充兵役・国民兵役の各種兵役にふるいわけるのが、徴兵検査であった。

徴兵検査は全国的に四月一六日から七月三日までの間に行われ、二〇歳になったばかりの若者たちがふんどしやさるまた一枚の真つ裸になって順番を待った。身長、体重、胸囲などの計測や内科系の病気を調べ、最後はふんどしもはずさせて医者が急所を強く握って性病の有無を確認めたという。検査の結果、甲種、乙種、丙種、丁種、戊種の五種類に分類した。基準は肺結核などの感染性の強い病気持ちなどは別として第一に身長だったが、太平洋戦争に入ってからはずしもそうではなくなっ

た。自分の名前が読み書きできる程度の学力であっても、ある程度身長があり、強健な体格ならば甲種合格となった。海軍は視力を重視したが、陸軍では眼鏡をかけていてもかまわなかった。

市内朝日町の旧額田郡公会堂（岡崎市公会堂）は、額田郡と岡崎（戦前の岡崎市域）の徴兵検査会場に使われた建物である。公会堂で検査を受けた人の記憶を紹介する。

《徴兵検査を受けた人の証言》

自分も終戦間に徴兵検査をここで受けた。その頃になると兵隊がたくさんいっただから、よほどのことがない限り合格になったよ。甲種だとか乙種なんていういろいろな区分は、以前はやっていたらうけれど、状況が悪くなってからはそんなものなかった。「合格！」って大声で言われて、みんな兵隊にとられたよ。ただ、病気持ちはどうも体格が良くてもはねられた。リン病とかの性病、結核、それと痔ろうはだめだった。

壁に両手をついて腰を折れって命令されて、尻の穴も検査された。下着も脱いで素裸になるのは、軍医の前での検査の時だけだった。性病の検査はシンボルをギューツと握られて、あれで本当にわかるのかと思っただけだね。男ばかりだったから恥ずかしいという気持ちはなかったけれど、当時は家で親にも裸を見せるなんてことはなかったから、驚いたよ。今の若い人はそんな感覚わからんだろうけど。

《徴兵検査を受けた人からの手紙》

徴兵検査は昭和一二年七月一日でしたが、チビだった私は当然丙種で兵隊には縁のないものと思っていました。ところが甲種合格と宣言され、びっくりするやら蒼くなるやら。その後、第二補充編入となりましたが、まさか自分が甲種とは思っていませんでした。しかし、その数日後の七月七日支那事変が勃発し、謎が解けました。軍隊に一年もの縁のできたスタートでした。

そして終戦後の昭和二一年夏、岡崎へやっつたこと帰ってきた時の一面の焦土の中に、ボツンと公会堂が残っていたのを見た時にはホッとしました。自宅は両町で跡形もありませんでしたが、故郷の周辺で唯一の想い出の建物が現存していてくれたことは何よりも嬉しく、いつまでもというか、あと残された僅かな一生、忘れられないでしょう。

かなり前に、小学生に徴兵検査の話をした際、そんなのはイヤだと言えよよかったのにと。徴兵うんぬん以前に生きていく社会そのものが違うことを理解してもらわねば、戦争が伝わらないことを教えられた。

今年には終戦から七十八年。日本が戦争をしていたことを知らない世代が増え、終戦時に成人していた戦争体験世代は数年のうちにほぼゼロになるという。戦争体験者からじかに話を聞いた世代として、体験者の当時の思いを受けとめ、守り伝える重さを今さらながら強く感じている。



至宝展展示風景

今年四月、私は岡崎市美術博物館から岡崎市社会教育課文化財係へ異動しました。平成十年の入庁時に美術博物館に配属され、主に地域の歴史資料の調査、収集、整理、研究、展示を行い、担当した展覧会は二七本、うち自主企画（巡回展内で地域展示を企画した場合も含む）が二二本で「家康の肖像と東照宮信仰」「額田―その歴史と文化」をはじめ主に地域の歴史を紹介する展覧会を企画してきました。岡崎は家康の生誕地であり、家康や三河武士が有名ですが、実は寺社の多い地域であり、市内には約三五〇もの寺院があります。また美術博物館は「心を語るミュージアム」をコンセプトとしていることから、「天台のほとけ」「三河念仏の源流」「三河の禅林」「三河浄土宗寺院の名宝」「祈・PRAY―古今東西祈りの風景」「法隆寺展」「至宝 燦めく岡崎の文化財」など寺社や信仰に関する展覧会や講座を企画し、ご所蔵者の皆様、関係機関各位のご協力のもと、その歴史や文化財を紹介してきました。

新たに配属された社会教育課文化財係は、文化財の保護や活用、文化財に関する催しをおこなう部署です。私は主に建造物

や美術工芸品に関する事務（文化財指定・き損・修理・現状変更等の届出や補助金執行など）を担当しています。美術博物館と同じく文化財に関わる部署ですが、その役割は異なります。美術博物館の活動でジレンマを感じていたのが、資料調査の際に状態の悪い資料や建物を発見しても、美術博物館では資料を整理し、適正な温湿度の収蔵庫で保存して劣化を抑えることはできても、修理など状態を改善をする支援はできないことです。文化財の修理は稀少な材料や高度な技術を用いて専門業者が行うために費用がかかり、この所有者負担が修復を進めるうえでネックとなります。文化財係は市内文化財の修理や防災、公開活用などの補助に関する事務を担うことにより、所蔵者の負担を軽減し、文化財の保護や活用を促進することができま

す。美術博物館と社会教育課が連携して文化財の調査研究、収集、保存、保護、活用を進めることにより、多くの人々が岡崎の歴史や文化の価値や魅力を共有し、歴史文化資産を守り、未来へ継承していくことができるよう、自らの業務に努めていきたいと思っています。

6

NEW FACE



今年度より新しく美術博物館の学芸員に着任いたしました、安本翔音です。どうぞよろしくお願いたします。徳川家康の旧名、「元康」をひっくり返して「やすも」とです。是非覚えていって下さい。生まれは豊橋、育ちは東京です。岡崎とは馴染みがないのですが、生まれの国、三河に帰って来たということで、勝手ながら親しみを感じております。

大学では、日本中世史を特に学び、村落にある寺社と民衆について、信仰や普段の生活の中での関わりについて研究しておりました。また、史蹟研究会というサークルに属し、毎年、京都や奈良などの史蹟を巡ったり、行事に参加したりしておりました。そのため、文化財や寺院史料等が多く残っている岡崎で今後働いていけることをとても楽しみにしております。

新しく岡崎に来たということで、まだまだ勉強中の身ではありますが、歴史の音をいたるところで感じられる、岡崎の魅力は今後さらに様々な場で発信していきたいように頑張りたいと思います。

安本 翔音

SHOP INFORMATION



昨年の9月より長らくお休みをいただいておりますが、無事に美術館の改修工事も一段落つき、7月1日より約10ヵ月振りにミュージアムショップも再開致します。そして今年で5回目となるリサイクルガラスを再利用したガラス工芸品を制作している「岡崎ガラス工房 葵」の3人のガラス工芸作家による作品展「うつわのかたち」を7月1日(土)～7月17日(月・祝)の日程で開催致します。今年には工房オープン40周年。そんな節目の年にふさわしい、「日常使い」をテーマにした食卓用の器や花器などの作品が数多く並びます。また、NHK大河ドラマ特別展「どうする家康」にちなんだ、シダや鹿の角をあしらった家康と本多忠勝バージョンの兜のオブジェも入荷予定です。淡く、優しい光を放つリサイクルガラスの作品を、ぜひこの機会に見にいらして下さい。

営業時間 10:00 - 17:00
定休日 月曜日(祝日の場合は営業。翌火曜日が振替定休日となります)
TEL 0564-83-5952 FAX 0564-83-5953
MAIL yagura@b-soup.com
HP <https://www.facebook.com/museumshop.yagura>

YOUR TABLE



岡崎市美術館併設のカフェレストラン『YOUR TABLE』。ガラス張りの店内には太陽の光がいっぱい入り、お洒落で開放的な空間が広がります。ランチ時には景色を愉しみながらお食事をすることができます。カフェタイムにはケーキセットや軽食などを販売中。
※3月16日より再開

営業時間 11:00～21:30 土日祝 10:00～21:30
定休日 月曜日(祝日の場合は営業。翌火曜日が振替定休日となります)
LUNCH 11:00 - 14:30 (L.O.14:00)
TEA 14:30 - 17:00 (L.O.16:00)
DINNER 18:00 - 21:30 (L.O.20:30)
TEL 0564-28-0141
HP <https://your-table.owst.jp>

岡崎資料叢書『岡崎町方文書』刊行のお知らせ

初の全文活字刊行！

今春刊行した『岡崎町方文書』は、近世の岡崎町に関する史料を収録しています。

近世の岡崎町は城下町・宿場町として発展し、現在の岡崎市の原点でもあります。

収録史料は、主に伝馬町商家であった小野惣兵衛家に伝来した糸絵文書と、小野右兵衛家に伝来した大黒家文書です。小野

(糸屋)惣兵衛家は和紙・酒・小間物を営み、宿の間屋役のほか、御用開頭取として、また、小野権右兵衛家は米・薬種・質を営み、

伝馬町の庄屋として活躍した家です。両家の資料群は昭和二〇年の岡崎空襲を免れた貴重な史料です。

いずれの史料も、近世岡崎町の様相をリアルに今日に伝えてくれます。

内容

一章 町のあらまし

二章 町年寄と庄屋

三章 人馬継立と問屋

四章 町と藩

五章 生業とくらし

好評発売中

『岡崎町方文書』

『中根家文書』

『長嶋家御用日記』

『大樹寺文書』

『瀧山寺文書』

展覧会図録等



ご購入方法は当館ホームページをご覧ください。なお、見本は当館開館中に手にとってご覧いただけます。

表紙画像：重要文化財 井伊直政・本多忠勝連署血判起請文(毛利博物館、部分)



開館時間 午前10時～午後5時
※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後休日でない日)
年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

HP <https://www.city.okazaki.lg.jp/museum>

ARCADIA OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

【岡崎市美術館ニュース／アルカディア】 第95号 2023年7月発行
編集・発行 岡崎市美術館
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町1番地 岡崎中央総合公園内
TEL 0564-28-5000(代表)